ジョン・ベラーズにおける社会と教育

浜　林　正　夫

1

名誉革命前後の思想史的研究は，政治思想史としてはジョン・ロックに焦点をあわせて多くの成果を生みだし，経済思想史としては，いわゆる固有の重商主義の成立と展開という視角から，やはり多くのすぐれた業績を生んできている。イギリス重商主義研究は，利子率論争や貨幣改鋳論争，さらにプロテクショニズムの成立をめぐり，あるいは最近ではイングランド銀行の設立をめぐって，1690年前後をひとつの焦点としてきているともいえよう。もちろんここにも見解の不統一はあり，残された問題も少なくないのだけれども，政治的にはトーリ対ウィッグ，経済的にはフリー・トレーダー対プロテクショニズムという対抗関係とその社会的基盤との思想史的解明は，かなりはっきりとした見通しをもってきているといってよい。

しかし名誉革命前後における大土地所有制の形成とその裏面をなす小生産者層分解のいっそうの進展を考慮にいれるばあい，政治的には名誉革命を推進し支持した社会層の内部に，ふつう考えられているよりもっと複雑な内部矛盾がふくまれていたのではないかという推定が一応は可能であり，経済的にも穀物輸出奨励金法の成立や1690年代の織布工のたたかいなどを考えると，一般にプロテクショニズムといわれているものの内部にも，もっと多様な利害の錯綜を推定せしめるものがある。とりわけ，1640年から60年にいたるピュウリタン革命が，議会派の内部においても長老派からディガーズにいたるまでの内部対立をもち，それらのおのおのがなんらかの形で17世紀後半にその影響を残していることを考えれば，たとえば平等派に代表されたような社会階層が名誉革命の時点で，どういう政治的思想的な表明をもちえたのか，あるいはもちえなかったのかという問題は，いぜんとして解明されないままに残されている，といわなければなるまい。

わたくしがいまここでとりあげようとするジョン・ベラーズ(1654～1725)は，これまで主として教育思想史のなかでとりあげられてきた人物であり，そのもっとも有名な著作である『産業学校設立の提案』(1695)にしめされているかれの教育思想は，たとえば矢川徳光氏によって，ロックの「反動的な」教育論に対して，「本当の進歩的な教育思想」という評価をうけたものであった。[1] 同時にベラーズはまた，マルクスによって「経済学史上の傑物」[2] という評価をもうけており，かれの貨幣についての見解や，分業の弊害とその廃止の必然性の主張や，とくに，労働こそがすべての富の源泉であるという主張などは，マルクスが『資本論』のなかでその理論の傍証として引用しているところであり，『産業学校設立の提案』ほど有名ではないけれども，ベラーズの『貧民，マニュファクチュア，交易，植民地および不道徳性にかんするエッセイ』(1699)は，経済思想史におけるきわめて興味ふかい文献であるといってよい。ベラーズはまたジョージ・フォックスの流れをくむクェーカーであり，クェーカーのなかでは穏健派にぞくしていたとはいえ，宗教思想の面でも，たとえばロックなどとは，かなり異なった立場にたつといえる。こういう点から考えてみると，ベラーズには，名誉革命のいわば主流に位置してい

1)　矢川徳光『新教育への批判』(刀江書院，1950年)20ページ。ただし『現代教育学・4・近代の教育思想』(岩波書店，1961年)所収の論文では，矢川氏のベラーズ評価は変化し，ウィンスタンリの革命的な道に対し，妥協的・改良的な道をあらわすものとしてベラーズがとらえられている。

2)　マルクス『資本論』第1巻第13章第9節(注)309.

るロックとは，かなり異なった思想がみられるのではないかという予想が可能である。この予想が十分に裏づけられるどうか，ここにロックよりももっと民衆的な思想が表明されているのかどうかは，本稿が全体として答えるはずであるが，ベラーズの教育，経済，宗教の諸思想をバラバラにきりはなして解釈したり評価したりするのではなく，ひとつの思想体系としてとらえるこころみを，とにかくここでくわだててみたい。それが名誉革命の時期の思想史的解明になにほどかのプラスをもたらしうれば幸いである。

2

ベラーズの経済思想にかんする研究はきわめて少なく，研究史とよびうるほどのものはないといわなければならない。ベラーズの思想のいくつかの点に注目したマルクスを除けば，ベラーズをウィンスタンリの空想的共産主義とオーエンらの初期社会主義とを結ぶ線の上に位置づけ，その思想を「18 世紀前夜の労働者階級の立場のもっともすぐれた主張」[3] とよんだベルンシュタインや，このベルンシュタインの評価を批判して，ベラーズは「断じて社会主義的思想家として」論ぜられるべきではなく，その提案は，むしろ「貧民労働搾取策の 1 特殊形態」[4] にすぎないとみる高橋誠一郎氏との見解が対立しており，そのほかでは，17 世紀イギリスの貧民問題に関心をよせていた P・S・ベラスコがベラーズの経済思想の特徴をいくつか指摘している程度である[5]。

これらの研究においては無視されているのだが，ベラーズの経済思想をもっとも特徴づけているのは，その農業重視の考え方だといわなければならない。この点を正しくとらえることが，わたくしはベラーズ解釈の鍵であると思う。この農業重視の考え方は，「労働は富の父，土地はその母」というペティの命題と同じような，「土地は富の基礎であり，規則正しい労働は富の偉大な生産者である」[6] とか，「土地と労働は富の基礎である」[7] とかいう命題を生みだしているのであるが，それだけのことであるならば，これはとりたててベラーズの思想的特徴ということはできない。むしろそこには，土地自体が生産の 1 要素であり，富の母胎であるという当時の一般的な誤解すら，ひそめられているとみるべきであろう。しかしベラーズはたんに土地を富の母とみるだけではない。かれの経済思想をほんとうに特徴づけているのは，じつは農業，工業，商業という諸産業のあいだのバランスのとれた発展という思想なのであり，そしてそのなかで農業にこそ中枢的な役割が与えられるべきであるという主張なのである。いうまでもなく当時の重商主義思想はふつう外国貿易の順な差額をもっとも重視し，そこから商人，とくに貿易商人の役割を賛美しており，さらにもっとたちいった分析をこころみたばあいにも，貿易差額の基礎となるべき輸出品工業の保護育成を要求するにとどまっていた。それは，貨幣資本の不足への対策，あるいは幼弱な初期産業資本の育成という政策目的に奉仕するという歴史的な根拠をもつものであったが，ベラーズはこういう一般的傾向に反発している。ベラーズによれば，輸出奨励政策は必然的に貿易戦争をひきおこし，国家間の対立を激化せしめざるをえないのであるが，クェーカーの立場から戦争に反対し，国家間の対立の激化を憂えて『ヨーロッパ国の若干の理由』(1710) という著作をあらわして国際平和を提唱したベラーズは，もっと根本的に輸出競争そのものに反対する。それぞれの国が工業品の輸出にとくに力をいれざるをえないのは，ベラーズによればじつは，工業品の生産過剰があるからなのであり，言葉をかえていえば，諸産業，とくに工業と農業とのあいだに発展の不均衡があるからにほかならない。たとえば最近の織布工の暴動にみられるような社会不安は，ひとつには雇傭の不安定によるものであるけれども，根本的には工業人口が多すぎると

3) E. Bernstein, *Cromwell and Communism*, London, 1930, p. 282.

4) 高橋誠一郎『重商主義経済学説研究』(改造社，昭和 7 年) 739 ページ。

5) Philip S. Belasco, "John Bellers," *Economica*, June, 1925.

6) John Bellers, *Essays about the Poor, Manufactures, Trade, Plantation, & Immorality*, London, 1699, Dedication.

7) *Ibid.*, p. 12.

いうことが原因である。これに対して「農民と漁民とをふやせば，工業生産者の数は減り，食料は豊富となり，財貨の販売は促進され，職人たちの不満はいちじるしく緩和されるであろう。」[8] 一般的にいえば，工業の発展はそれが「土地と農業あるいは漁業との正しい比率なしに」[9] なされるばあいには過剰生産をひきおこすであろうし，「(土地の改良による)農業の発展なしには，工業を発展せしめることはできないし，その工業の発展によって交易も発展するのである。」[10] 農業とのバランスを失ったばあいには工業人口が多すぎるということがありうるし，まして富のたんなる配分者にすぎない商人は過剰となることがあり，そのときには商人自身はゆたかになるであろうけれども，国全体としては貧しくなる，とベラーズは考えている[11]。ここにみられる経済社会の把握は，いわゆる重商主義者たちの通常の見解とはまったく逆に，商人の役割の軽視と，工業の過剰生産を外国貿易によってではなく国内市場の拡大によって解決しようとする主張なのであって，のちにみるようにベラーズの「産業学校」の提案のうちにも，農業の発展による諸産業間のバランスの回復という狙いがふくまれているのである。

もちろんベラーズも，貿易差額が逆であってよいと考えているわけではなく，とくに奢侈品の輸入は極力抑えるべきであると主張されている[12]。しかしかれにとっての関心の中心は決して貿易差額にあったのではなく，バランスのとれた生産の発展ということにあったのであり，順なる貿易差額によってもたらされる貨幣や金銀の増加それ自体に，ベラーズはなんらの意味をも認めていなかった。かれによれば，貨幣はそれ自体としてなんらの価値をもつものでもなく，たんに商品の価値の「保証物(pledge)および尺度」[13] にすぎないものであり，貨幣価値はその流通量と商品流通量との比によって決定されるという貨幣数量説の立場が表明されている。流通貨幣が最低必要量以上にふえれば，それは死蔵物(dead stock)となるか，あるいは貨幣価値が低下する[14]。したがって輸出をふやすことによって貨幣の増加をくわだてることは無意味とならざるをえない。ロックも，周知のように貨幣数量説の立場をとっていたし，かれの『統治論』では，貨幣はそれ自体としては有用ではないという見解がのべられているが，しかしロックのばあいにはそれにもかかわらず，金銀に価値を認めたものとして「人類の普遍的な同意」というややあいまいな契機が導入され，そのためにいぜんとしてロックは貿易差額論の枠内にとどまったのであった。これに対してベラーズは，その貨幣軽視の考え方において，いっそう徹底的であり，そのために，貿易が国内経済の発展とどのように関連するかという困難な問題が捨象されてしまうとともに，貿易差額論という枠をこの当時としては珍らしく，突破してしまうことができたのである。

ベラーズが貨幣の重要性を否定したのは，たんに理論的な理由にのみよるものではなかった。むしろそこには，貨幣を重視することのために生じている営利主義や価値の転倒をはげしく非難するという道徳的な，あるいは宗教的な姿勢がひそんでいる。貨幣を重視し，すべてのものを貨幣によってはかろうとする社会は不健全な社会であり，「政治体における貨幣は不具な身体の松葉杖のようなものであり，身体が健康であれば貨幣は厄介ものにすぎない」[15] のであって，貨幣がなければ詐欺や窃盗もなくなるだろう，とベラーズは考えている[16]。政治体の健全な，そのほんらいあるべき姿からいえば，価値のほんとうの尺度は貨幣ではなく，労働でなければならない[17]。労働こそがすべての富の源泉であると同時に，また価値の尺度たるべきものである。かれの「産業学校」はまた，経済社会のこういったあるべき姿を，信頼と相互協力とのうえにきずきあげることを，その主

8) *Ibid.*, p. 12.
9) *Ibid.*, p. 8.
10) *Ibid.*, p. 9.
11) *Cf. Ibid.*, p. 10.
12) *Cf. Ibid.*, p. 12.
13) *Ibid.*, p. 13.
14) *Cf. Ibid.*, p. 13.
15) John Bellers, *Proposals for raising a College of Industry*, London, 1695, p. 3.
16) *Cf. Ibid.*, p. 22.
17) *Cf. Ibid.*, p. 3.

要な狙いとするものであった。

「貧民の労働は富者の鉱山である」[18] というベラーズの有名な主張は，以上のようなかれの経済思想との関連においてとらえられなければならない。貧民の労働なくしては富はありえず，したがって富者もありえないというベラーズの主張は，ベルンシュタインの解釈によれば，さらに発展して富者による貧民の搾取およびその搾取の廃絶の可能性という社会主義的傾向をふくむものとされている。しかしこの解釈はあきらかにゆきすぎをふくむといわねばならないであろう。ベラーズよりも約半世紀前に，やはりベラーズと同じように「いかなる富もすべて貧民の労働と勤勉より生ずる」[19] といったピータ・チェインバレンは，それだけにとどまらず，富者の富は「貧民からの収奪の……記念碑」[20] にほかならないとのべているが，ベラーズのばあいにはこの富者による収奪という指摘はみられない。むしろここにみられるのは，かつて高橋誠一郎氏がベルンシュタインを批判しつつ指摘したように[21]，貧民の労働こそが富の源泉なのだから，貧民を有利に雇傭することが富者にとっても有利なのだという調和的な思想なのである。高橋氏はここから，ベラーズの思想の根本は，いかに有利に貧民を働かせるのかという「貧民労働搾取策の1特殊形態」だという結論をみちびきだしているのだが，しかしこの解釈もまたベルンシュタインの解釈とは逆の方向へゆきすぎてしまっている。ベラーズにみられるのは，搾取とその廃絶を主張する社会主義思想でもなければ，搾取のいっそうの強化のための方策を提案する「特殊形態」なのでもなく，貧民の労働が富の増大をもたらし，それが貧民の生活向上を保証するとともに富者の利益をも保証するという調和の思想なのであって，その調和の根拠をベラーズは農業の発展にもとめていたのである。それが農業の発展にもとめられたかぎり，かれは貿易優先や工業優先の思想や政策に反対であったし，その意味では部分的にではあるが体制批判的であった。ベラーズが「労働は労働者に生活の権利(a Right to a living)を与える」といい，したがって貧民に働き口を保証することは慈善ではなく富者の義務であるというとき[22]，そこには市民社会それ自体をさえ批判する原理がふくまれているとみることもできるであろう。しかしかれの体制批判はあくまで部分的であるにとどまり，市民社会の止揚をめざすものでなかったことはいうまでもない。それどころか，ベラーズのばあいには，ピュウリタン革命期のピータ・チェインバレンや平等派がしめしたほどの，小生産者的な意味における資本主義批判すら解消されつつあったといわなければならない。たしかに，貧民の労働こそ富の源泉であるという思想や，労働は生活権を与えるという主張は，平等派的であるといえる。しかしベラーズがもっとも重視した農業の発展は，その具体的な内容としては施肥などの技術的改良にとどまるものではなく，あるいは技術的改良のとうぜんの前提として，共有地の分割や囲込みの要求をふくむものであった[23]。ここには平等派との決定的な違いがある。囲込みの反対をとなえた平等派に対

18) *Ibid.*, Dedication. 同じ表現は別の著作でもくりかえされている。たとえば *An Epistle to the Quarterly-Meeting of London and Middlesex*, London, 1718, p. 8.

19) Peter Chamberlen, *The Poore Mans Advocate*, London, 1649, p. 13.

20) *Ibid.*, p. 12.

21) 高橋誠一郎，前掲書，738ページ。

22) John Bellers, *Proposals for raising a College of Industry*, p. 21.

23) *Cf.* John Bellers, *An Abstract of G. Fox's Advice concerning the Poor*, London, 1724, p. 14, do., *An Essay for Imploying the Poor to Profit*, London, 1723, p. 5, do., *An Essay towards the Improvement of Physick*, London, 1714, p. 40. 少し長いがこの最後の著作から引用しておく。「わが国の森林や共有地は(そこに住む貧民をまるでインディアンそっくりにしてしまい)勤勉への妨げとなり，怠惰と不遜を育てている。もしこれらの土地を，各人の権利に応じた分割令によって分割しうるようにするなら，これらの土地の多くは非常に改良され，これらの貧民の多くはもっと勤勉で誠実な生活様式をもつようになり，そして各人がその小屋に加えて一定の土地をもって耕作するようになるから，(このように囲込みをしたばあいには)現在の共有地よりももっと価値の大きいものとなるであろう。」

24) 浜林正夫『イギリス革命の思想構造』(未来社，1966年) 144ページ参照。これはウィリアム・テンプルの言葉である。

して，「自分たちの所領の改良によってではなく，隣人の所領をひきさげ」，貧困への平等化をはかろうとするという批判があったのだが[24]，ベラーズの著作集の編集者であるA・R・フライはベラーズの思想を，「富者をおしさげる平等化ではなく，貧者をおしあげる平等化」[25]として特徴づけている。だが正確にいえば，ベラーズにはすでに平等化という視点は急速にうすれつつあったといわなければならない。あるいは言葉をかえていえば，客観的には平等化を捨てて生産力発展の方向を展望しつつ，なお平等化のイメージを残しているといってもよいであろう。かれの「産業学校」がユートピア的な性格をもっているのはこのためである。それにもかかわらず，あるいはむしろそれゆえにこそ，ベラーズは農業の発展のうちにこそ生産力発展の中枢があるのだというブルジョア的発展のもっとも基本的なコースをとらええたのであって，小生産者的性格を残しているからこそかえって純粋にブルジョア的でありえたのだし，純粋にブルジョア的であったからこそ，部分的にせよ体制批判的でありえたのだといいうるように思われる。少なくとも経済思想にかんするかぎり，ベラーズにみられるのはロックの思想のよりいっそう徹底した形であった。

3

以上のようなベラーズの経済思想にみられる特徴は，かれの教育思想のなかにもあざやかにうかび上がっている。かれの「産業学校」は，貧民雇傭のための組織であるとともに決してそれにとどまるものでなく，同時に文字通り「学校」であり，かつまた生産共同体でもあった。かれはその提案のなかで，当時貧民雇傭の施設をさすのにふつう用いられた「ワークハウス」という名称は，監獄を思いださせ，隷従性をしめすといってこれを避け，また「コミュニティ」という言葉は宗教的共同体を思いださせるといってこれをも避け，「カレッジ」という言葉をえらんだとのべているが[26]，かれの提案の最大の特徴は，かつてクループスカヤが指摘したように，この「学校」を「貧民のための特殊学校と考えなかった」[27]という点にある。貧民の雇傭の問題を，救貧院や授産所の枠内にとどめるべきではないという主張は，ピュウリタン革命期にすでにたとえばB・ゲルビエなどにみられたのであるが[28]，しかし貧民問題にかんする考え方の主流は，やはり貧民雇傭の特殊施設としてワークハウスを考えるというものであり，ベラーズとほぼ同時代のトマス・ファーミンやロックの提案もそのようなものであった。この点にベラーズとファーミンやロックなどとの決定的な差があるのであって，この点をぬきにして両者の類似性や違いを論ずることは無意味である。たとえばファーミンもワークハウスにおいて1日2時間の学習時間を設けよといい，そこでの学習内容として，聖書と読み書き算数，および有用な技術をあげているが[29]，そのかぎりではベラーズの提案とあまり大きな差はないようにみえる。ベラーズもまた「産業学校」における学習内容として，読み書き以上は不必要だといい，これに技術教育と宗教教育とをつけ加えているのである[30]。しかしベラーズとファーミンとの差は，ファーミンが労働のかたわらに学習を，と考えたのに対し，ベラーズが労働そのものが教育だと考えたという点にある。クループスカヤはベラーズを「学習と生産労働との結合」の必要をといた最初の人としてあげているが[31]，それはまさに結合であって，並列ではな

25) A. Ruth Fry, *John Bellers, 1654～1725, Quaker, Economist and Social Reformer, His Writings reprinted, with a memoir*, London, 1935, p. 18.

26) *Cf.* John Bellers, *Proposals for raising a College of Industry*, pp. 14, 23.

27) クループスカヤ(勝田昌二訳)『国民教育と民主主義』(岩波文庫) 75ページ。なお矢川徳光『新教育への批判』14ページ参照。

28) *Cf.* B. Gerbier, *A New-Years Result, in favour of the Poore*, London, 1652, p. 5. 前述のチェインバレンも同じ考え方である。なおピュウリタン革命期における貧民論については，拙稿「イギリス革命期の経済思想VI—貧民問題—」(『商学討究』17巻3号，1967年1月)を参照されたい。

29) *Cf.* Thomas Firmin, *Some Proposals for the Employment of the Poor*, London, 1681 (A Collection of Pamphlets concerning the Poor, London, 1787), pp. 14～17.

30) *Cf.* John Bellers, *Proposals for raising a College of Industry*, pp. 15～18.

31) クループスカヤ，前掲書，5ページ。

い。労働そのものが教育であると考えるベラーズは，たんに貧民の子弟のみをこの「学校」で学ばしめよというのではなく，資産階級の子弟にもここでほんとうの教育を与えよととといている[32]。労働をともなわない教育は，ベラーズによれば「怠惰な教育」であり，それは「怠惰への教育」[33]でもあった。貧民のための教育とジェントルマンのための教育という2本建ての教育を考えたロックと異なり，ここには労働による教育という視点からする教育批判があり，したがって体制批判があるといってよい。

「産業学校」が貧民のための特殊施設ではないということは，さらにそれが自給的な一種の生産共同体として提案されていることのうちにもあらわれている。ファーミンやロックのばあいには，ワークハウスで与えられる技術教育はもっぱら麻やリンネルなどの紡織作業に限定されているが，ベラーズの提案する「産業学校」においては，300人のメンバーのうちにはさまざまな種類の手工業者44名，農業労働者24名，婦女子82名などがふくまれており，すでにのべたように，貨幣を廃止し，信頼と協力にもとづく自給的な共同体が構想されているのである[34]。ロバート・オーエンがベラーズの提案に関心をよせ，これを公刊したのは決して偶然ではない。

以上のような意味で，「産業学校」は教育論としても経済論としても，体制批判の原理をふくむものであったが，しかしベラーズはこの提案を同時に営利的なものとしても考えていた。この提案の冒頭には，この提案の目的として，(1) 富者への利益，(2) 貧民の生活向上，(3) 青年の教育という3点がかかげられているが[35]，この「学校」はこれに投資する人には十分な利益を保証する企業としても考えられているのである。すでにのべたように，貧民に雇傭を与えることは慈善ではなく富者の義務だという思想がベラーズにはあるのだけれども，しかしこれとならんで，「貧民への配慮は富者の利益」[36]という思想がもう一方にはある。この点ではベラーズとロックなどとの差はかなりうすれてしまう。貧困が悪徳と怠惰とひいては社会不安を生みだすのだから，貧民を雇傭し，勤勉ならしめることによって社会不安のもとをとりのぞいてしまおうという発想は，貧民論のいわば主流をなす考え方であり，こういう考え方をもつかぎりベラーズの「産業学校」もやはり貧民のための特殊施設として考えられていたのではないかという疑いさえ，いだかせる。しかしここでもベラーズは，さきにあげた「産業学校」の3つの目的が矛盾なく調和するものと考えるオプティミズムによって，この疑問に答えるのである。と同時に，貧民の雇傭が貧民自身のモラルと生活を向上せしめ，国全体をゆたかにし，富者にも利益を与えるというこのオプティミズムは，ベラーズの教育論がほんらいもっていた社会批判を先鋭化せしめず，やわらかくそれをつつみこんでしまうこととなった。このこともさきの経済論のばあいと同じように，解体段階にある小生産者的立場の反映であるといえよう。

4

階層的にはベラーズはロンドンの裕福な商人の子として生まれ，いくつかの所領をもつ地主であり，ロックと同じような階層にぞくしていたといえる。その政治思想も穏健なもので，1712年にだされた『議員選挙の改善のためのエッセイ』には，当時の選挙制度への批判がのべられてはいるが，それはいわば技術的な批判たるにとどまり，平等派のような選挙権拡大の要求はもちろんのこと，独立派的な選挙区改正の要求さえみられない[37]。別の論文では，「極端はつねによくない……。すべての極端には中間があり，美徳はそこにある」[38]といわれ，「神は秩序の神であり，……混

32) *Cf.* John Bellers, *An Epistle to the Quarterly-Meeting of London and Middlesex*, pp. 1～2.

33) *Ibid.*, p. 3.

34) *Cf.* John Bellers, *Proposals for raising a College of Industry*, pp. 15～18.

35) *Cf. Ibid.*, p. 1.

36) *Ibid.*, p. 1.

37) *Cf.* [John Bellers], *An Essay towards the Ease of Elections of Members of Parliament*, London, 1712, rep. in A. Ruth Fry, *op. cit.*, pp. 104～107.

38) [John Bellers], *Some Considerations, as an Essay towards reconciling the old and new ministry*, London, 1712, rep. in *ibid.*, p. 108.

乱はかならず罪であり悪である」[39] ともいわれている。このように社会階層としても政治思想においても，ベラーズはむしろ穏健派であり，決してラディカルではなかった。このベラーズに，いままでのべてきたような経済思想や教育思想を生みださせたものは何であったのか。その思想的な影響をたどれば，おそらく最大の影響をもったものとしてあげられるのはクェーカー思想であろう。ピュウリタン革命期におけるクェーカー思想がするどい社会批判をふくむものであったことは，これまでいく人かの研究者によって指摘されてきたところであり，その社会的基盤が北部イングランドの農民層や職人層であったことについても，たとえばH・バーバーの指摘がある[40]。17世紀後半にクェーカーの社会的性格は次第に変化していってはいるけれども，思想的には個人主義的心情的傾向をもちつづけ，階層的には独立小生産者に支持されつづけていたことはあきらかである。1670年代からフォックスに師事し，迫害をうけたクェーカーの救援に北部へ出かけて活動し，みずからも1684年に2回逮捕されているベラーズはクェーカー信者集団のなかでその思想をうけつぎ，階層的にも小生産者層との接触から多くのものを学んだに違いない。「内なる光」の存在と生命の尊厳，信仰の自由，国際間の平和，宣誓拒否，を訴えたベラーズの思想は，クェーカーの伝統をうけつぐものである。ただベラーズは，フォックスのようにもっぱら内省と自己批判によって，魂の救いをもとめたのではない。同時に自然科学にも大きな関心をよせ，王立協会の発展を願ったベラーズは，より世俗的な形での活動を重視した[41]。教育と貧民雇傭こそが，世俗化された形においてキリスト教のはたすべき主要な課題なのであり，物質的富の増大と利益の追求のうちに，人をみちびく最良の刺戟があるとベラーズは考える。これは世俗化したクェーカー主義ともいえるものである[41]。没落する小生産者層がクェーカー思想の神秘主義的側面につよくひかれていったのと反対に，ベラーズには神秘主義的側面はまったくといってよいほどみられない。その点から考えても，ベラーズはロックよりももっと小生産者的な立場に近いところに位置しながら，やはりその没落する部分ではなく，上昇部分を代表していたといってよいであろう。

39) [John Bellers], *A Caution against all Perturbations of the mind*, London, 1702, rep. in *ibid.*, pp. 84～85.

40) *Cf.* H. Barbour, *The Quakers in Puritan England*, New Haven & London, 1964, p. 92.

41) *Cf.* John Bellers, *An Essay towards the Improvement of Physick*, pp. 10, 17. 数学のような証明可能な(demonstrable)学問は強制を必要としない，宗教的対立もこういう方向で解決さるべきだというベラーズの思想 (*Cf. Some Reasons for an European State*, pp. 10～15)は，クェーカーのものではなく，むしろ経験論のものである。

42) A. Ruth Fry, *op. cit.*, p. 21によれば，ベラーズに対しては，クェーカー思想を，「あまりに物質的な形」にうつしたという批判があるらしい。